昭和28年２月20日第三種郵便物認可　毎月１回１日発行
令和３年10月25日印刷　令和３年11月１日発行　第69巻第11号　通巻第821号

不二

一般版

11/2021

令和三年度第２回昇格・昇段試験成績発表
第35回不二現代書展要項発表

公益財団法人 日本書道教育学会

書蹟入門㊳　石橋 鯉城 監修

書蹟の種類㊱　（江戸時代の日本の書蹟②）

浅 野 秋 月

蕪村による「奥の細道」の文章（旅立ち）と俳画

是をや多ての者しめとして行道なを春ゝ末春。人々八途中に立ならひて後可け乃三ゆる末て八と見送るなる遍し。ことし元禄二と世にや奥羽長途能行脚只かりそめにおもひ多ちて呉天尓白髪能恨を可さぬといへとも耳尓ふれてい末多め尓…

山形県の山寺における芭蕉の句碑拓本

閑さや巌耳しみ入蝉乃聲　芭蕉翁

町人文化の勃興と俳人

江戸時代も五代将軍綱吉に至り、世の中は一変します。いわゆる武力政治から文治主義に移り、元禄年間（一六八八～一七〇四）に代表される町民文化が訪れます。

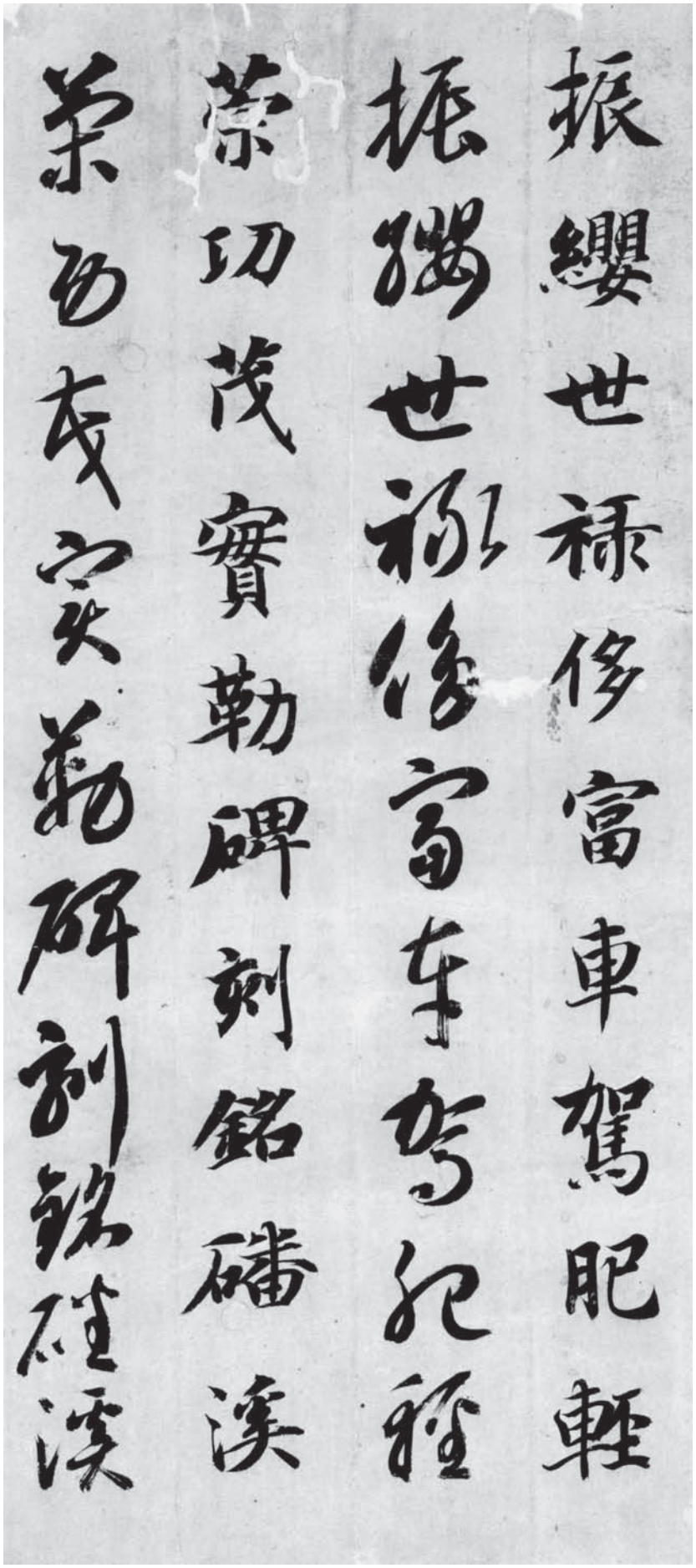
この期間は、大坂・京都を中心とする商業都市が繁栄して経済の発展が顕著になります。ここで町人の文化が抬頭して庶民の心にゆとりができ、文学や芸能などを享楽する環境が生まれました。

ここに**松尾芭蕉**（一六四四～一六九四）を取り上げます。彼は国民的な人で俳諧の世界で知られています。忍者の伊賀上野（三重県）で生育してのち江戸に住居を構え、俳諧を遊びから芸術的な境地まで昇華させました。紀行文「奥の細道」も単なる旅日記を離れた文章に仕立てています。文章はもちろん筆捌きも秀逸な作品に達しています。

一方、芭蕉を慕ってその影響を受けた人物に**与謝蕪村**が挙げられます。蕪村（一七一六～一七八四）は京都の人ですが、その名は犀水先生もご執筆の中国陶淵明の「帰去来辞」に由来すると言われています。俳画をはじめ点描画も知られています。現在、京都の金福寺（こんぷくじ）にある蕪村再興の芭蕉庵の庭で眠っています。

この両者ともに後世、多くの人に俳文学・俳画の道を開いています。

真草千字文

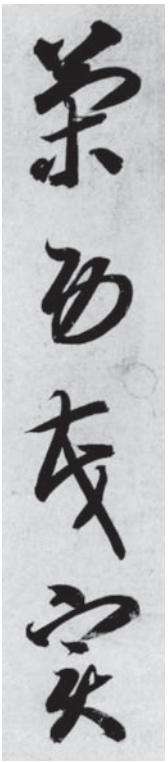


（驅轂）振纓　世祿侈富　車駕肥輕　策功茂實　勒碑刻銘　磻溪（伊尹）

（轂を駆り）纓を振う。世祿は侈富にして、車駕肥軽あり。策功の茂実なるは、碑に勒して銘に刻す。磻溪と（伊尹、）

漢字半紙　専門部（五段～準初段）『真草千字文』より「策功茂實」の四字の臨書

石橋鯉城臨



『真草千字文』　18ページ参照

智永（隋）真草千字文　第一三一句目

策功茂實（サクコウモジツ）

〈語　釈〉

策ハ竹簡ヲ編ミテ之レヲ作ル古ハ告命皆ナ之レヲ策ニ書ス功ハ勲績ナリ勞劬以テ國是ヲ策定スルヲ謂フ茂ハ盛ナリ實ハ虚ナラサルノ謂ナリ是レ羣英忠實以テ邦家ノ爲メニ籌策ヲ運ラシ嘉謀善計是レ獻シテ國富ミ兵强ク邦家ヲ泰山ノ安キニ置キ昇平ヲ致セルモノハ其籌策勲功ノ誠ニ茂實ナルヲ謂フナリ

※勞劬（ロウクク）…苦労　籌策（チュウサク）…策略

〈大　意〉

勲功高き者は記録され、後世にその名が実績としてほめたたえられる。

〈書き方〉

智永の真草千字文の真蹟本には、時に後人の如く落着かない部分もあるが、この策功茂實の草書は切れ味もよく、俯仰法の筆法に指法も加わって、小気味よさが味わえる。ここで、「策功茂實」の一字一字を見て行こう。

策…草冠は「ソ」の形で、下部に片仮名の「ア」と「ホ」がある。この「ホ」の横画は鋒で軽く書き、余力を残し、「ム」を書いて最後の点で締めている。

功…偏の「エ」から、旁の「力」へ行く処はまさに指法による表現の世界。大字ばかり習っていると、この指法には気付かないが、手本の偏と旁の処をよく観察してみよう。

茂…「草」の草書のように草冠は「ヒ」「ヒ」となっている。下部は「ヤ」と戈法の如しである。

實…今の常用漢字は本字の草書形から来ている。略字としても「実」は使われていた。冠と下部の「夫」を落ち着かせたい。

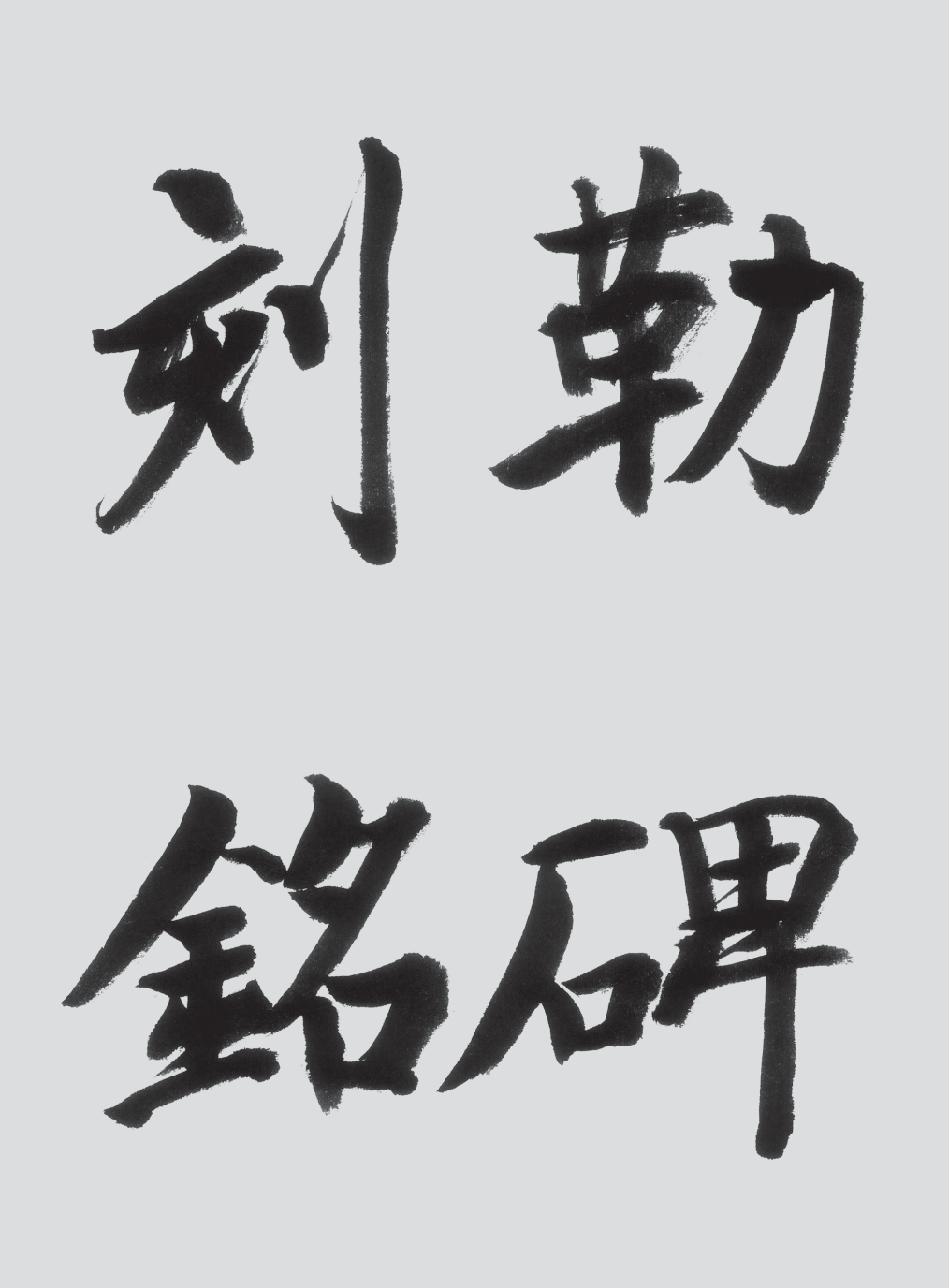
【用具・用材】

筆＝精品蘭蕊羊毫　墨＝顕微無間

紙＝松雪（三多軒製）

（習い方は25ページ）

漢字半紙（1級～5級）『真草千字文』より「勒碑刻銘」の四字の臨書



石橋鯉城臨

『真草千字文』 18ページ参照

智永（隋）真草千字文 第一三二句目

勒碑刻銘（ロク ヒ コク メイ）

〈語 釈〉

勒ハ刻ナリ碑ハ石ヲ建テ功績ヲ其上ニ書スルヲ謂フ即チ碑文ナリ刻ハ彫ナリ銘ハ志ナリ韻語ヲ繫ケテ其徳ヲ賛美スルノ謂ニシテ即チ碑銘ナリ是レ羣英ノ勲績功勞ヲ後世ニ傳ヘテ名譽ヲ不朽ニ存セシムルカ爲メニ其傳ヲ叙述シ且ツ銘ヲ繫ケテ之レヲ賛美シ之レヲ堅石ニ彫刻シテ建立スルヲ謂フナリ

〈大 意〉

石碑に勲功を彫り、後世まで伝えた。

〈書き方〉

○少し、小ぶりな臨書になっているので、一点一画おろそかにせず起筆の入り方、送筆の法、そして収筆の工合を参考手本と左側の版本の切り抜き写真を指で追い、よく観察したい。

○筆を手に取る前の書き方観賞が大事。これを見て何を感じ、何を表現したいかを考えよう。

【用具・用材】

筆＝永昌五号
墨＝顕微無間
紙＝毛辺

（習い方は25ページ）

漢字半紙（6級～10級）

「知過必改」の四字の臨書。「知過」または「必改」の二字だけを書いての提出も可。

石橋鯉城臨

※2頁の真草千字文の印影は真蹟本に依っているが、此処は関中本に依っている。却って関中本の方に書風の統一性を見る。両者の間の趣の違いに気が付かれただろうか。

関中本『真草千字文』 18ページ参照

智永（隋）真草千字文　第四三句目

知過必改（チカヒッカイ）

〈語　釈〉

知ハ識ナリ覺ナリ過ハ失ナリ無心ノ失之レヲ過ト謂フ必ハ果ナリ極ナリ改ハ更ナリ換ナリ是レ人其非ヲ覺リタルトキハ必ス之レヲ改ムルニ吝ナル可ラス過失タルコトヲ識ルモ猶ホ更ムルナクシテ其非ヲ遂クルハ大人君子ノ耻ツル所ナリ宜シク速カニ善ク改メ心神清涼一點ノ汚塵ヲ止メス俯仰天地ニ耻チサルヘキヲ謂フナリ

〈大　意〉

自（みずか）らのあやまちに気づいたならば必ず改む。

〈書き方〉

執筆の基本にかえる

①用具を机上に、置くべき処に落ち着かせ、書く準備を整える。

②坐法を決める。両足先を引きツマ先立ちの形とし、お尻を後に押し出し、背筋を伸ばし、前傾姿勢をとる。

③手本は拡げた半紙の左横少し上の見易い処に。

④半紙は四字書き用の折り方で四字枠を作る。上部の字を書く時は、少し手前に引きおろして書こう。

【用具・用材】

筆＝永昌四号　墨＝顕微無間

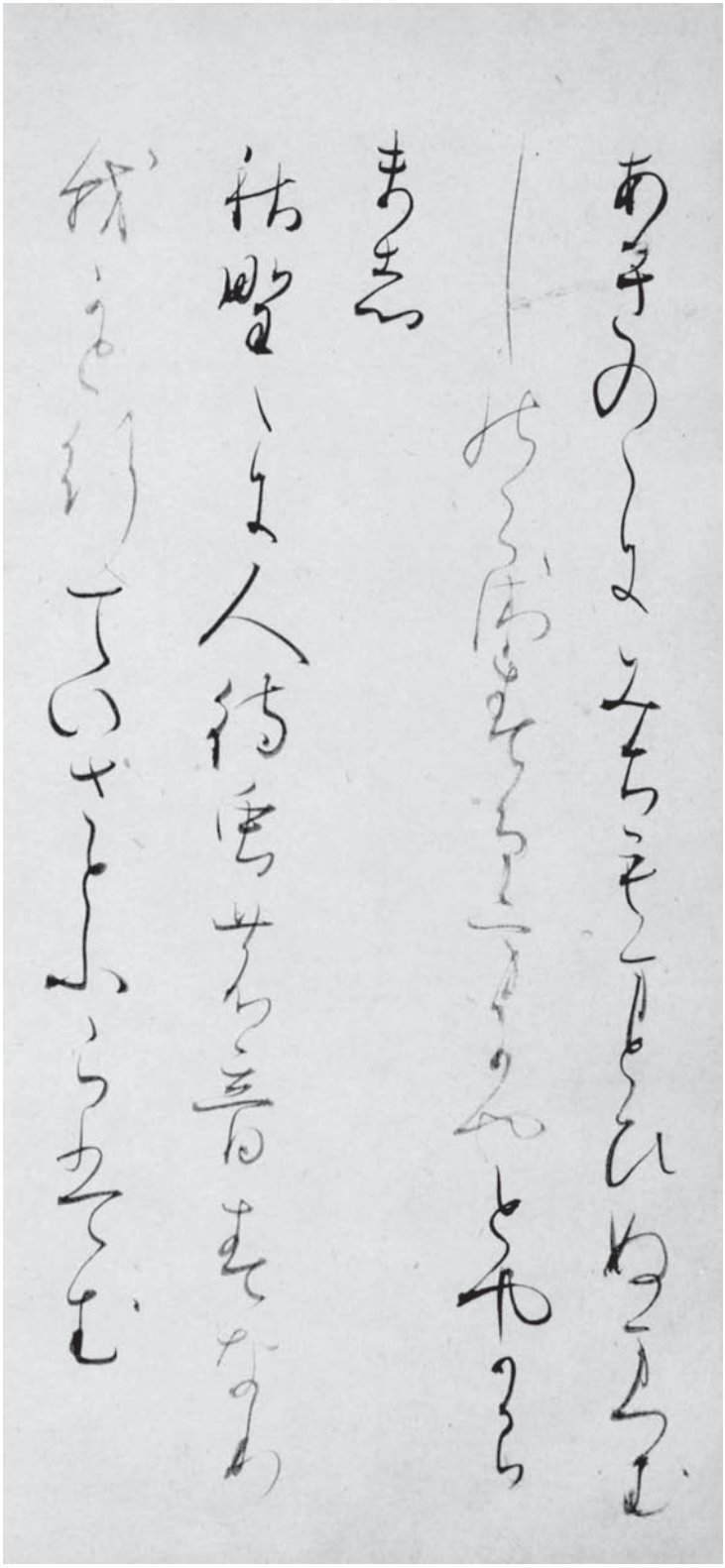
紙＝毛辺（中国製）

（習い方は26ページ）

かな半紙　専門部（五段～準初段）

左の『関戸本古今集』より「あきの丶尓」から「いさとふら盤む」までの五行を、半紙を縦に使用して臨書しなさい。

※原寸には拘らなくてよい。



（原寸）

あきの丶尓みち毛万とひぬ万つむ　し能こ衛春る方尓やとや可ら
ま志　秋野丶尓人待虫農音春な利　我可と行ていさとふら盤む

〈読み〉

秋の丶に道もまどひぬ松
虫のこゑする方にやどやから
まし
秋の野に人待虫の音すなり我
かと行ていざとぶらはむ

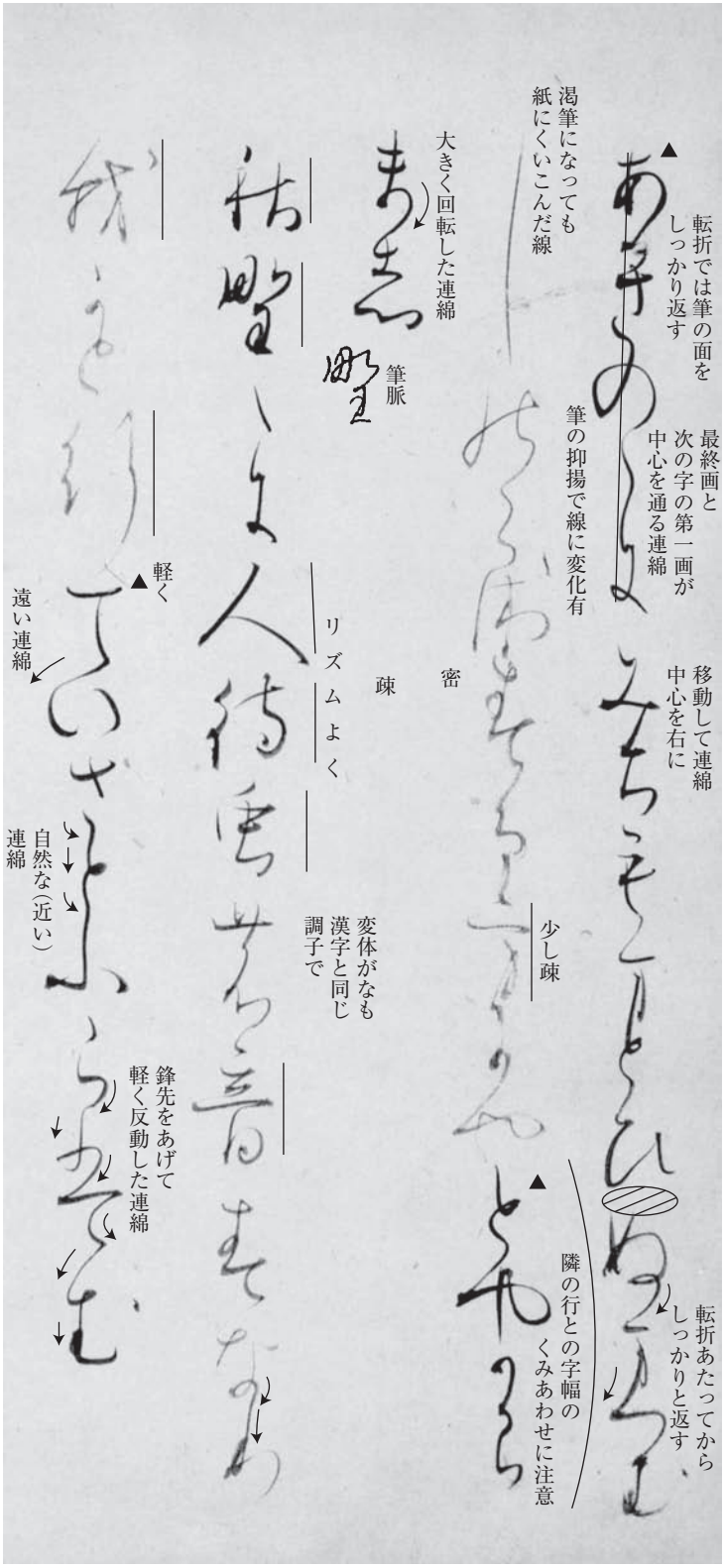
〈大意〉

私は秋の野に遊んで日も暮れ、道もわからなくなってしまった。ちょうど人の訪れを待つかのようにまつ虫の声がするので、できることなら一夜の宿を借りることにしよう。

秋の野に人を待つ虫の声が聞こえる。私を待っているのだろうか、いざ訪れてみよう。

（古今和歌集 巻第四 秋歌 201・202）

課題解説（かな半紙五段～準初段）



【ポイント】

○▲墨継ぎのめやす（含墨量を加減してひきしまった線を書く事が大切です）
○――　漢字の印　単体で重くならぬように
○漢字の単体表現と仮名の多字連綿
○仮名条幅への応用を試みたい

〈解説〉

今月の関戸本臨書も、筆の鋒先、腹、弾力を使い生きた動きのある線で潤渇や太細のある美しいかなの歌二首と見えますが、仔細に観察すると、此の二首にはどうやら全く異なる対照的な二首が並んでいます。二首目は、かな学習で漢字を如何に表現すれば良いかの好例が示されています。大きくなりがちな漢字は単体で伸びやかに、ただし重くならぬよう筆脈のあるリズムで歯切れよく書かれています。二行目では行間も広くとられています。二首目を**近景**とすれば、一首目は少し遠く感じられて**遠景**にも見えて、遠近感のある景色が生まれています。

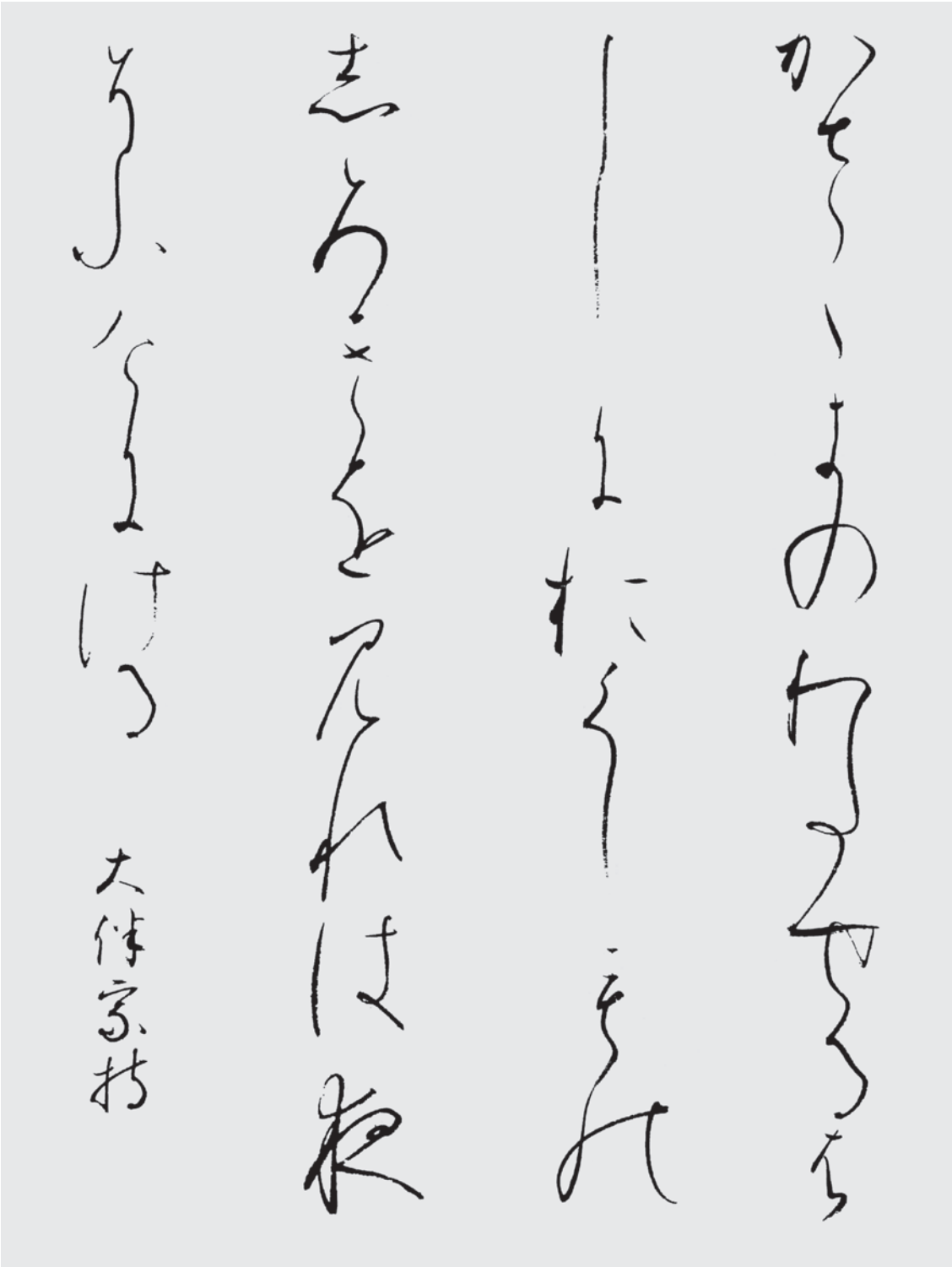
（八尋光華）

【用具・用材】

筆＝かな用小筆
墨＝かな用和墨
紙＝かな用雁皮

かな半紙（1級～5級）

左の図版の「かさゝ支の」から「ふ介尓ける　大伴家持」までを半紙を縦に使用して体裁よく書きなさい。



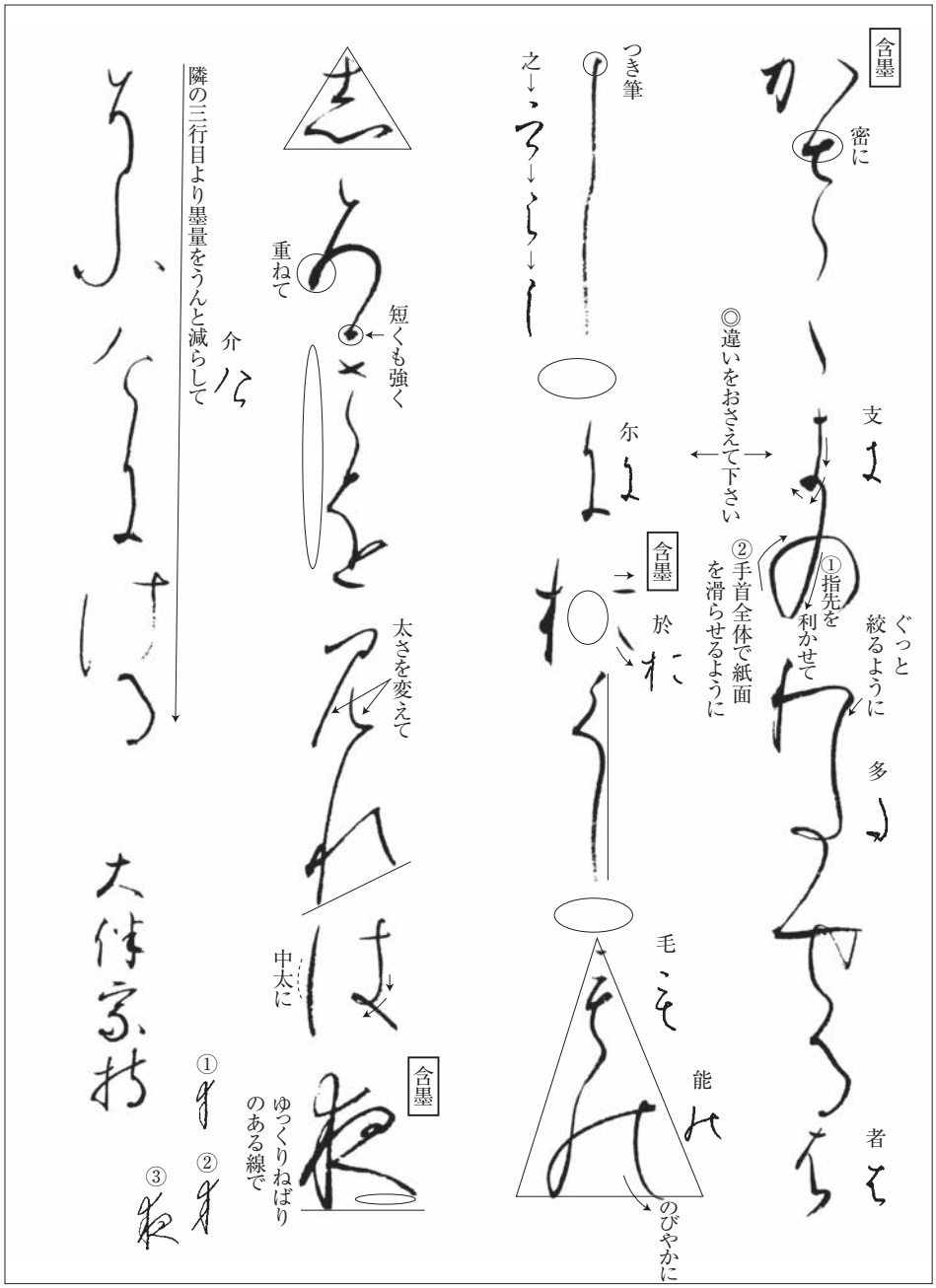
かさゝ支のわ多せる者／し尓於久し毛能／志ろきを見れは夜／曽ふ介尓ける　大伴家持

〈出典〉
安東聖空「梅雪かな帖（中）」より

〈読み〉
かさゝぎの渡せる橋
におく霜の
白きを見れば夜
ぞふけにける
大伴家持

〈大意〉
かささぎが翼を並べて架けたといわれる川の橋。
それにたとえられる宮中の橋に、真っ白な霜が降りて、その白の深さを見るにつけても、夜もいっそう更けてきたことよ。
（新古今和歌集　巻第六　冬歌620）

課題解説（かな半紙1級～5級）



ポイント

○墨の適度な濃さも大切です。墨を濃くしすぎると、粘りが出て線の伸びがなくなりますし、薄すぎると、全体的にゆるくなって、かな本来の美しさが表現出来なくなります。
余白が美しく見える墨色の研究を！

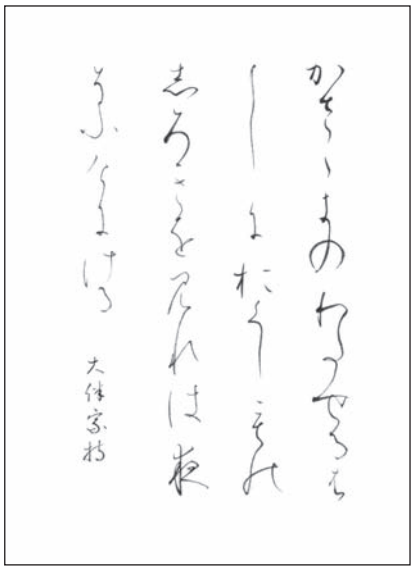
〈解説〉

今月も和歌一首を四行書きにします。

まずは一字一字をしっかり見て書くことが大切ですが、お手本を見ながら書いていると、運筆が単調になり線の勢いがなくなりがちです。書き込んで、自分のリズムで書けるようになると、太い線、細い線も自然な流れの中で表現出来るようになります。作品が呼吸していると感じられるようになるまで書き込んで下さい。筆を持つ時間がない時は、鉛筆で強弱をつけながら書いてみるのもいい勉強になります。

（甲谷景子）

〈参考臨書〉



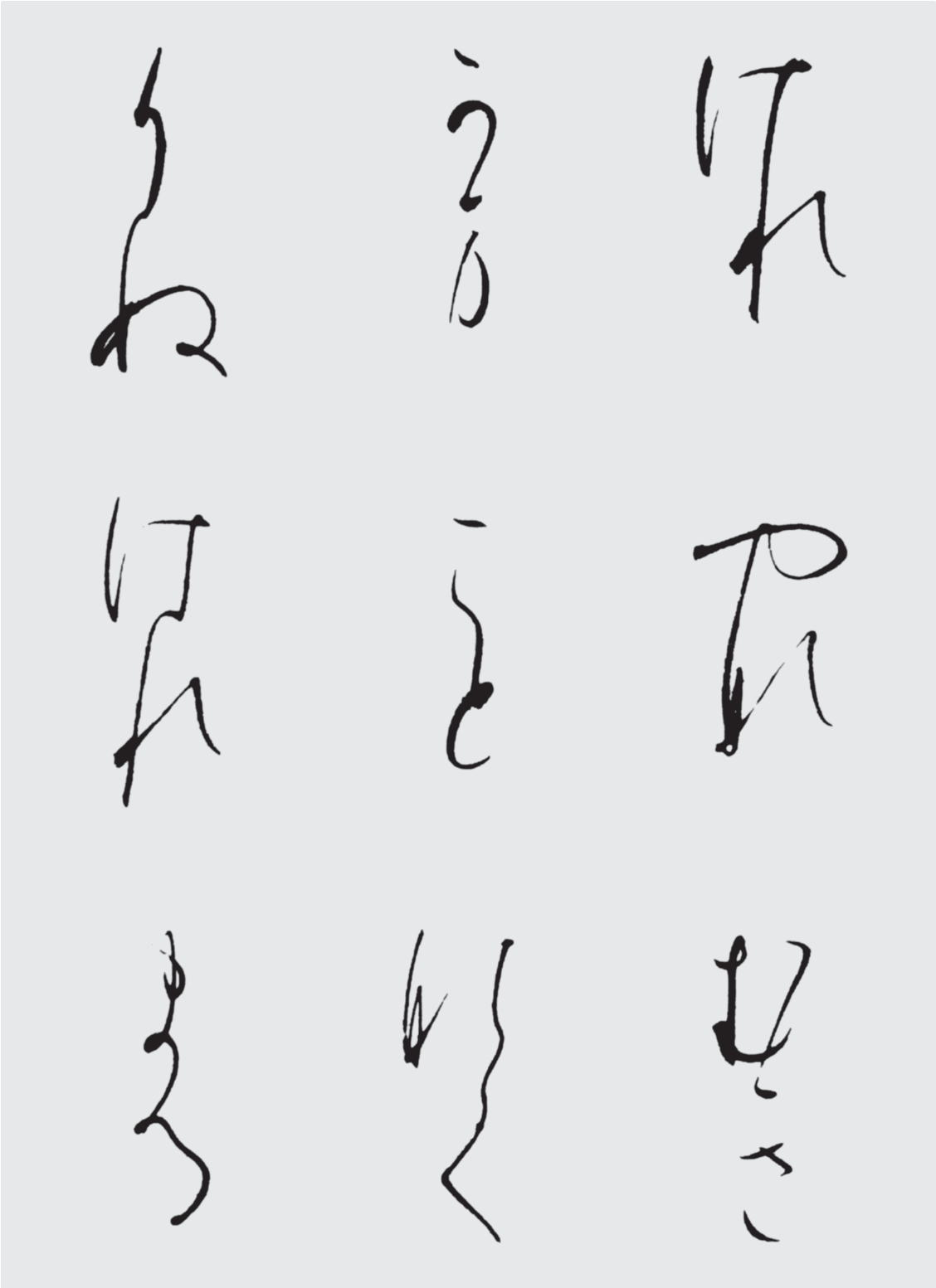
（甲谷景子臨）

【用具・用材】

筆＝かな用小筆
墨＝かな用和墨
紙＝かな用雁皮

かな半紙（6級～10級）

左の図版の「けれ」から「末る」までを半紙を縦に使用して体裁よく書きなさい。



けれ　や那　むき　可万　こと　那久　りぬ　けれ　末る

〈出典〉
安東聖空「梅雪かな帖（上）」より

〈解説〉
連綿の練習の三回目です。連綿学習は、かなには不可欠なものですから、しっかり学んでおきましょう。

かな文字は、原則、左から始まり右で終わるため、連綿線は右から左へ向かう斜線になるのが普通です。しかし、場に合わせてより美しく効果的につなげるために、連綿の仕方は様々になります。

お手本の一行目と三行目に「けれ」がありますが、同一文字の連綿であっても様子が全く異なっているのは、その一例です。

連綿による文字の位置の移動や運筆のリズムに留意して書いて下さい。（川島史子）

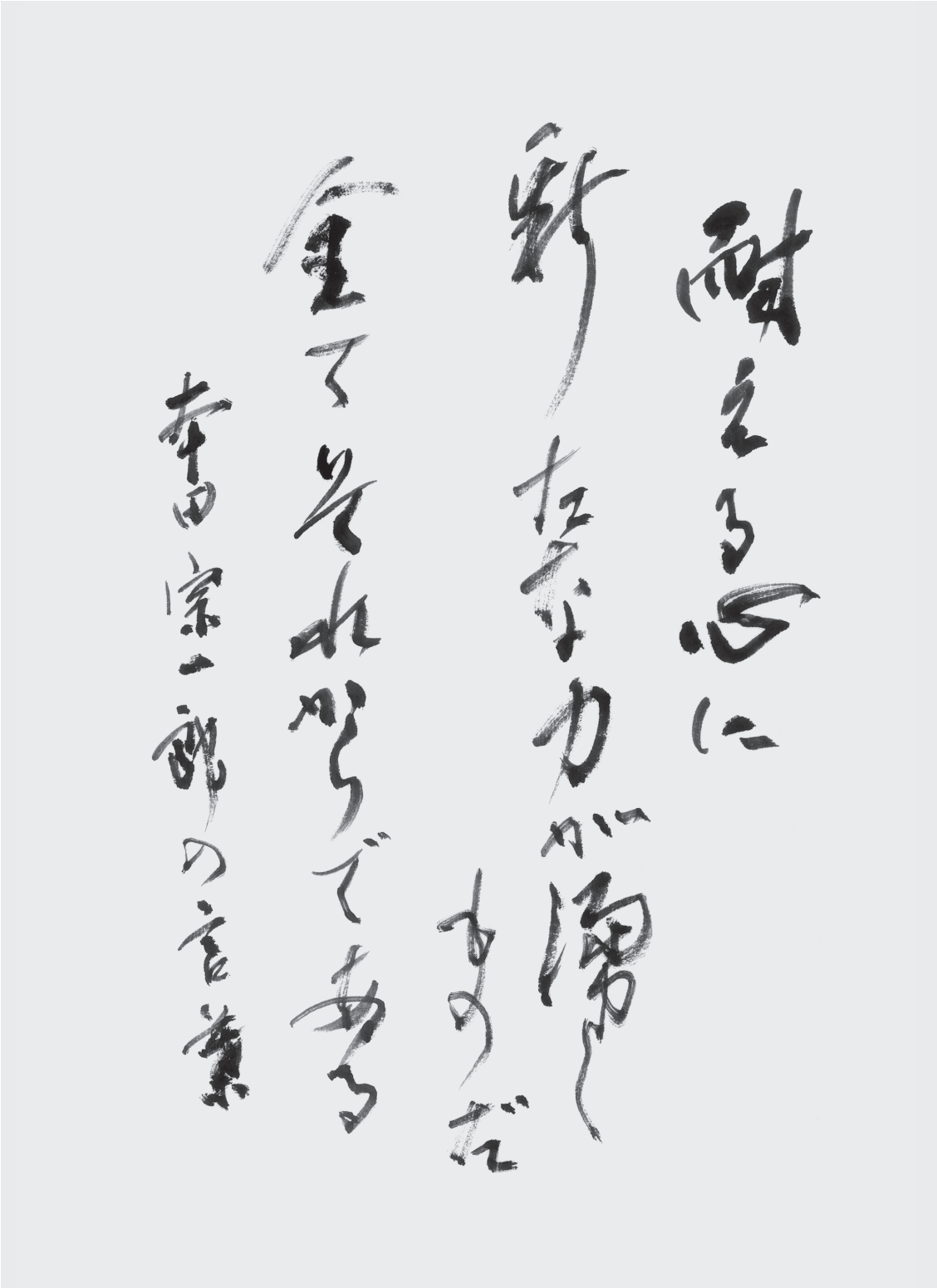
※なお、仮名の基本学習は、単体、連綿、変体仮名、古筆の臨書へと進められます。

【用具・用材】
筆＝かな細字用筆
墨＝かな用和墨
紙＝かな用半紙

（習い方は26ページ）

新和様半紙　専門部（五段～準初段）

参考手本　※半紙を縦にして使用



永井香樹書

耐える心に　新たな力が湧くものだ　全てそれからである　本田宗一郎の言葉

〈作者〉
本田宗一郎
（一九〇六～一九九一）

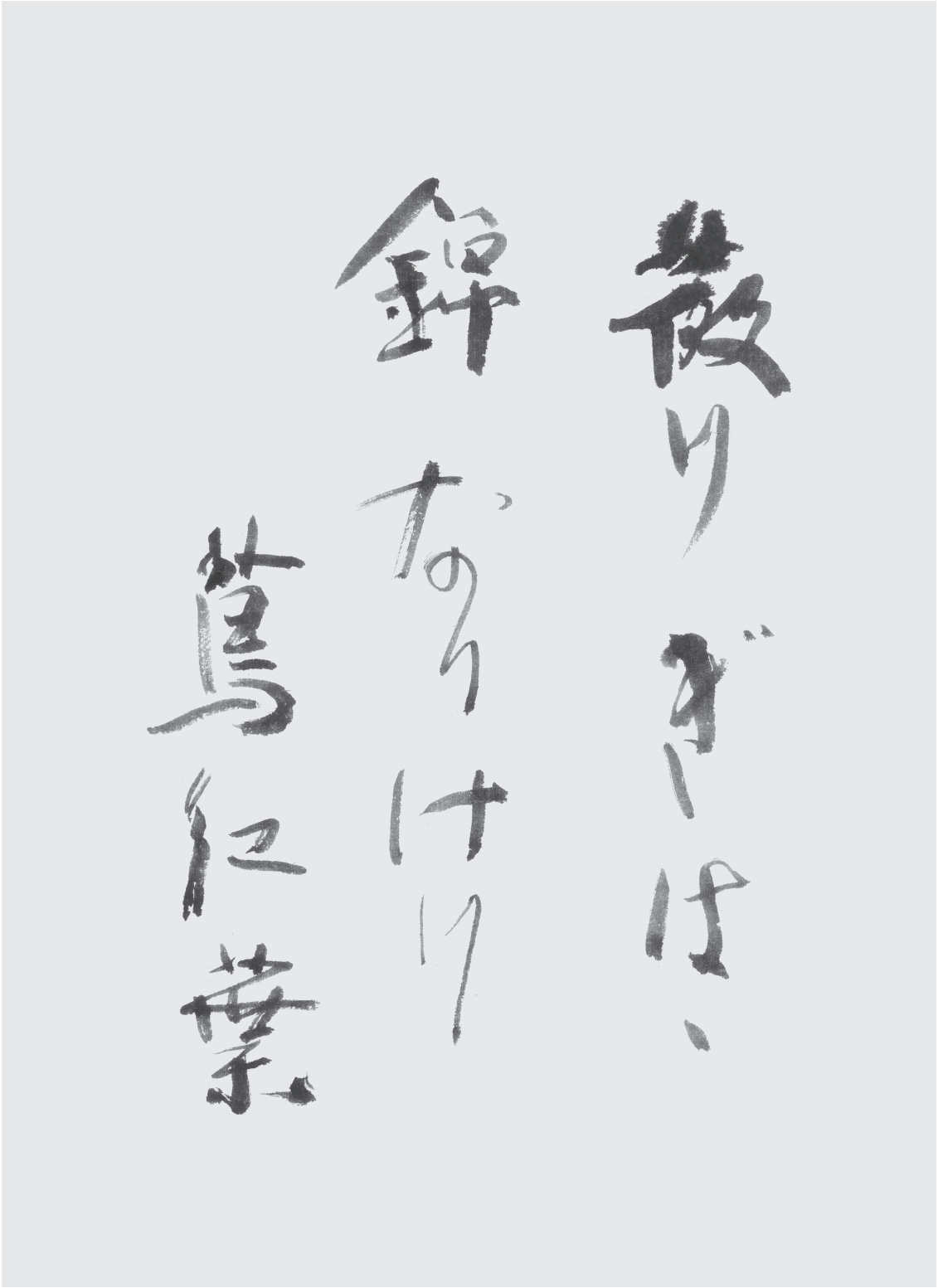
○文言を音読して、構成を工夫しましょう。
○「耐える心」をしっかりと書いて、二行目に三行目を添わせました。
○各文字の大きさに見合う行間をあけるようにしました。
○行の響き合いを大切にして、文言が伝わるよう工夫しましょう。
○本文と、教室名・氏名の行間を空けましょう。
○余白（字間・空間）は要白です。

【用具・用材】
筆＝八号和筆　全部おろす
墨＝和墨
紙＝手漉半紙

（習い方は26ページ）

新和様半紙（1級～10級）

参考手本　※半紙を縦にして使用



石橋鯉城書

散りぎは、錦なりけり蔦紅葉

〈作者〉永井荷風（一八七九～一九五九）

〈大意〉
蔦紅葉（つたもみぢ）は、散り際こそが錦を飾って美しい。

〈解説〉
○墨は淡墨で余白に溶け込むように。
○字数も十三字と少ないので、字粒はやゝ大き目にする。
○行立ては、三行で左右の余白の残し方を参考に。
○字の大小、字間、行間の取り方に留意して、萎縮しないように書きたい。

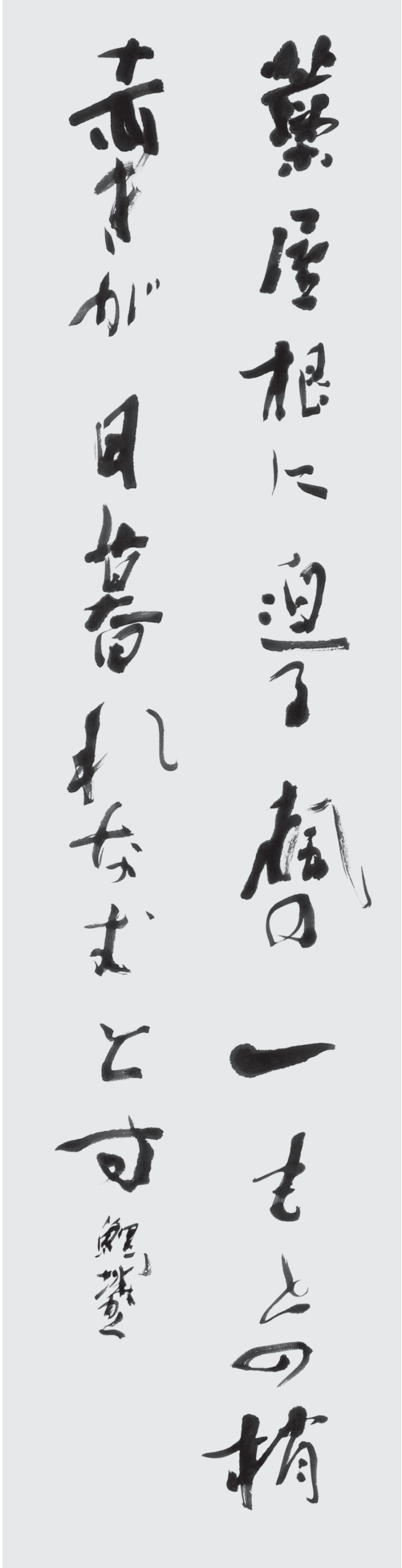
〈書き方〉
○**用紙**は黄色の中国製「毛辺紙」。用紙の色に合わせて、**墨**は千壽墨の三十年物を軽く磨って使った。いつも使用の端渓硯を使用。
○「散りぎは、錦なりけり　蔦紅葉」十三文字を半紙に三行で書いている。その為、一字〳〵も相当大きく書いている。**筆**は、長鋒の中筆、超長鋒に近い特製のもの使用。
○紙面上に濃淡の変化をつけて明暗を表現する。
例えば一、二行目の下部は墨も少なく、軽やかに、三行目は締めの意も込めて多少色濃く表現。
「蔦紅葉」の三字が一行目に対応して「止メ」の雰囲気を作る。
○全体として横画を平らに書き穏やかな表情を出し、「錦なり」の「なり」の処では「な」の終りの結びから「のり」のように続けて書く方法もある。

【用具・用材】
筆＝細字用長鋒羊毫筆
墨＝顕微無間　油煙淡墨
紙＝毛辺

（習い方は26ページ）

新和様条幅　専門部（五段～準初段）　参考手本

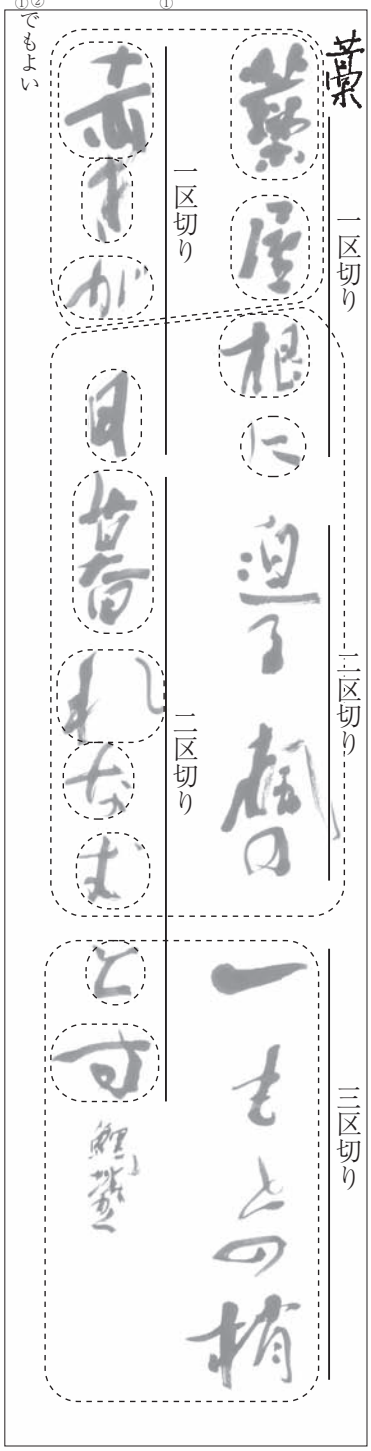
※新和様条幅は新和様半紙の有段者対象。条幅初出品の場合は、**準初段から**の出品となります。



石橋鯉城書

藁屋根に迫る楓の一もとの梢赤きが日暮れなむとす　〈**作者**〉岡麓（おかふもと）（一八七七～一九五一）

〈**大意**〉わら屋根に迫って育つ楓の紅葉が鮮やかだ。偶然にも日暮れようとする西陽が差しかかり、一層美しい。



①訥々と書き始めて、文字の横画の右肩のアガルのを避ける。②国字の縦書きの表現形式の伝統を守る。

③点線で囲まれた字を石コロのように並べる。

④7頁の八尋先生の**関戸本の課題解説**を理解し、新和様の条幅作品としても応用されたい。

（用紙　画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

〈解説〉

○冒頭は重さを考え小さ目の漢字で表現した。

○「楓」は大切な秋を代表する紅葉なので強弱、明暗を考え、木偏は太目に、画数の多い「風」は鋒先を使って軽快に。

○「一」前後に余白をとり、太目に点が動いたかの如く書き存在感を。

○二行目は「赤きが日」「暮れなむとす」の二区切りでまとめている。

【用具・用材】

筆＝白鶴展翼（中国製筆）
墨＝顕微無間
紙＝不二

※10月号20頁課題予告に誤りがございました。左記の通り訂正の上、お詫びいたします。
（誤）「わらやねに～蛸赤きが～」→（正）「わらやねに～梢赤きが～」

牛橛造像記

牛橛捨於分段之鄉。騰遊无礙之境。若存託生。

牛橛（ぎゅうけつ）　分段（ぶんだん）の鄉（きょう）を捨（す）て、无礙（むげ）の境（きょう）に騰遊（とうゆう）せんことを。若（も）し託生（たくしょう）を存（そん）すれば、（天上の諸佛所に生ぜんことを。）

漢字条幅 専門部（五段～準初段）

牛橛造像記より「牛橛捨」から「无礙之境」までを臨書しなさい。

（用紙　画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

林田香濤臨

牛橛捨於分段之鄉　騰遊无礙之境

〈時代〉北魏（四九五年）

〈大意〉牛橛が輪廻の迷いの境界を離れ、無礙自在の天上界に遊びますように。

（解説は27ページ）

漢字条幅（1級～10級）　参考手本

（用紙　画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

小久保嶺石書

月明秋水寒

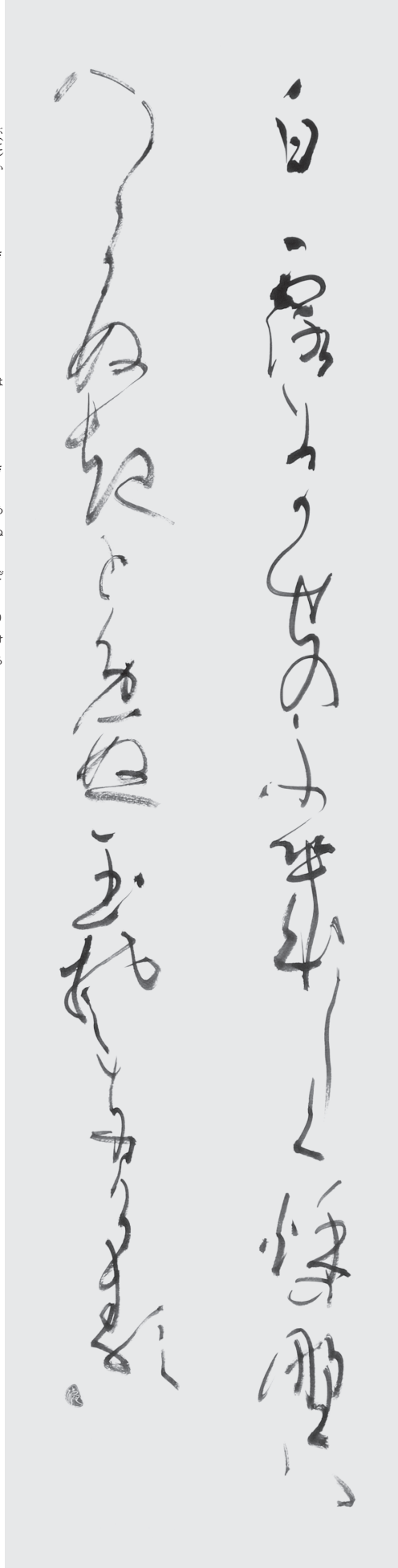
〈読み〉月明らかにして秋水寒し　〈作者〉李白（りはく）（七〇一～七六二）「賦得白鷺鷥送宋少府入三峽」

〈大意〉月は明るく、秋の水は冷たい。

（解説は27ページ）

かな条幅 専門部（五段～準初段） 参考手本 ※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙 かな用画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）



中村清徳書

白露爾可せのふ幾しく秋の野八つらぬ起と免怒玉楚ち利介類

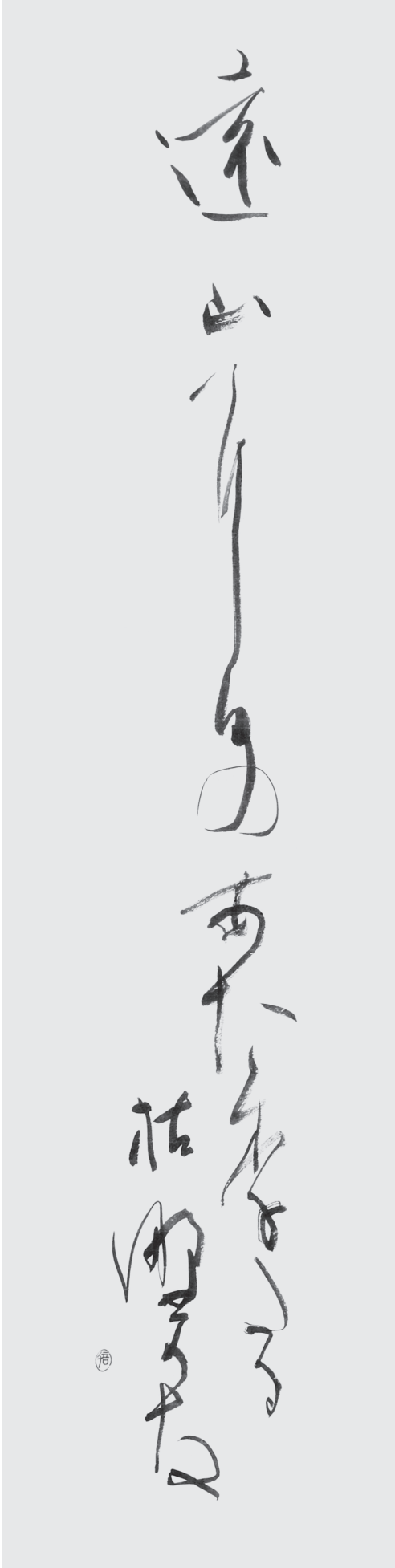
〈読み〉白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける　〈出典〉後撰集　巻六　秋歌　文屋朝康（百人一首37）

〈大意〉草葉の上に一面に置いた白露に、風のしきりに吹く秋の野は、その飛び散るさまが、ちょうど緒で貫きとめてない玉（真珠）が乱れ散るように見えることだなあ。

（解説は27ページ）

かな条幅（1級～10級） 参考手本 ※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙 かな用画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）



内堀信嶺書

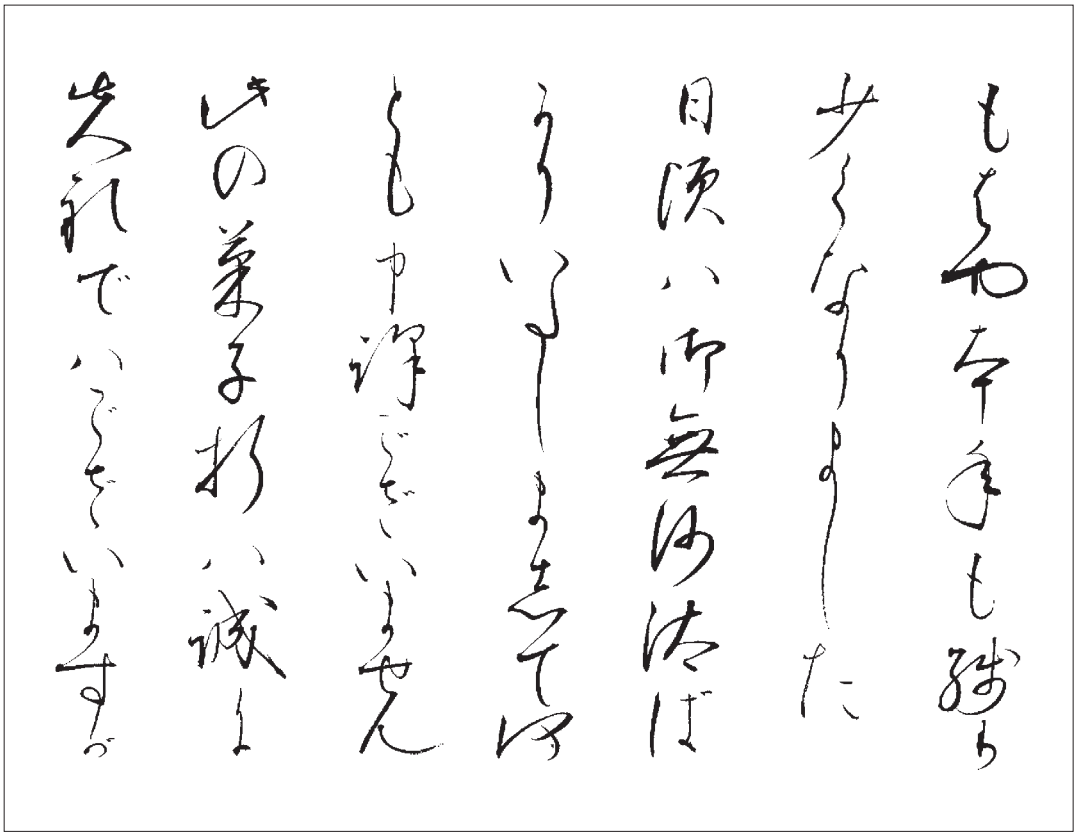
遠山耳日の安太李多る枯野可奈

〈読み〉遠山に日の当りたる枯野かな　〈出典〉高浜虚子（一八七四～一九五九）

〈大意〉日のかげった枯野を歩いて行くと、行く手の遠くに見える山の頂にぽっかりと日が当たった。

（解説は27ページ）

実用書（随意課題）



梅雪手紙帖より（安東聖空）

も者や本年も残利少くなりました
日頃八ご無沙汰ば可りい多しま志て何とも申譯ございません
此の菓子折八誠尓失礼で八ございます可

○出品用紙は、下側に示した清書用紙でも、これをコピーして書いても結構です。洋紙に書くことをここでは原則とします。

参考の小筆
・白楽
・玉梓
・選毫圓健

・月別出品券（65ページ）とバーコード出品券（段級欄に「実用」と記入）を左下に貼付してください。

切りとって提出してください（コピーも可）

教室名	
氏名	

月別出品券を貼る

今月の競書課題

専門部　会友～準六段

今月の出品期間11月1日(月)～11月8日(月)必着

漢字半紙

千里雖共照

〈出典〉『鳴鶴作品草稿集Ⅱ　宋 欧陽脩』
〈読み〉千里共に照らすと雖も
〈大意〉遠く離れている私たち二人を月が照らす。
浮雲吐明月　流影玉階陰　千里雖共照
安知夜々心　欧陽脩

かな半紙

左の短歌を、半紙を縦使用、自運縦書き。
（変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由）

秋風の吹あげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

〈大意〉吹き上げる「吹上の浜」に立っている白菊は花であろうか、波が打ち寄せているのだろうか。
〈作者〉菅原道真（古今和歌集　巻第五　秋歌下272）

新和様半紙

左の短歌を、半紙を縦使用、自運縦書き。
（漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重）

路傍の切石の上に腕拱みて空を見上ぐる男ありたり

〈大意〉道路脇の敷石の上に立ち、腕組みをして空を見上げている男がいた。
〈作者〉石川啄木（一八八六～一九一二）　〈出典〉新編啄木歌集（岩波文庫）

12月号課題予告

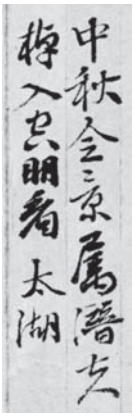
漢字半紙	安知夜々心　（鳴鶴作品草稿集Ⅱ　宋 欧陽脩）
かな半紙	あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　（古今和歌集332）
新和様半紙	頬につたふなみだのごはず一握の砂を示しし人を忘れず　（石川啄木）
漢字条幅	身外水天銀一色　城中有此月明無　（范成大　田園四時雑興）
かな条幅	冬枯の森の朽葉の霜の上に落ちたる月の影の寒けさ　（新古今和歌集607）
新和様条幅	いい言葉だまつたく素朴な雄弁だ村長さんだなと林檎むいてる（北原白秋）

※課題及び課題の文字は変更することもあります。

漢字条幅

左の語句を、画仙紙半折（136cm×35cm）を縦使用、自運縦書き。
（書体自由）

中秋全景属潛夫
棹入空明看太湖



※「中秋全景」は右の図版の通りでもよいが一般的な書き方でもよい。
〈読み〉中秋の全景潛夫に属す。棹を空明に入れて太湖を看る。
〈大意〉中秋の名月に照らされる全ての景色は隠者のもの。澄みきった水に映る月影に棹さして太湖を遊覧する。
〈出典〉『鳴鶴作品草稿集Ⅱ　范成大 田園四時雑興』

かな条幅

左の和歌を、画仙紙半折（136cm×35cm）を縦使用、自運縦書き。
（変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由）

秋の野を分け行く露にうつりつゝわが衣手は花の香ぞする

〈大意〉秋の野を分けていく袖を濡らす露で、移り移りして、わたしの袖は、いろいろな花の香がすることだ。
〈出典〉新古今和歌集　巻第四　秋歌上335

新和様条幅

左の短歌を、画仙紙半折（136cm×35cm）を縦使用、自運縦書き。
（漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重）

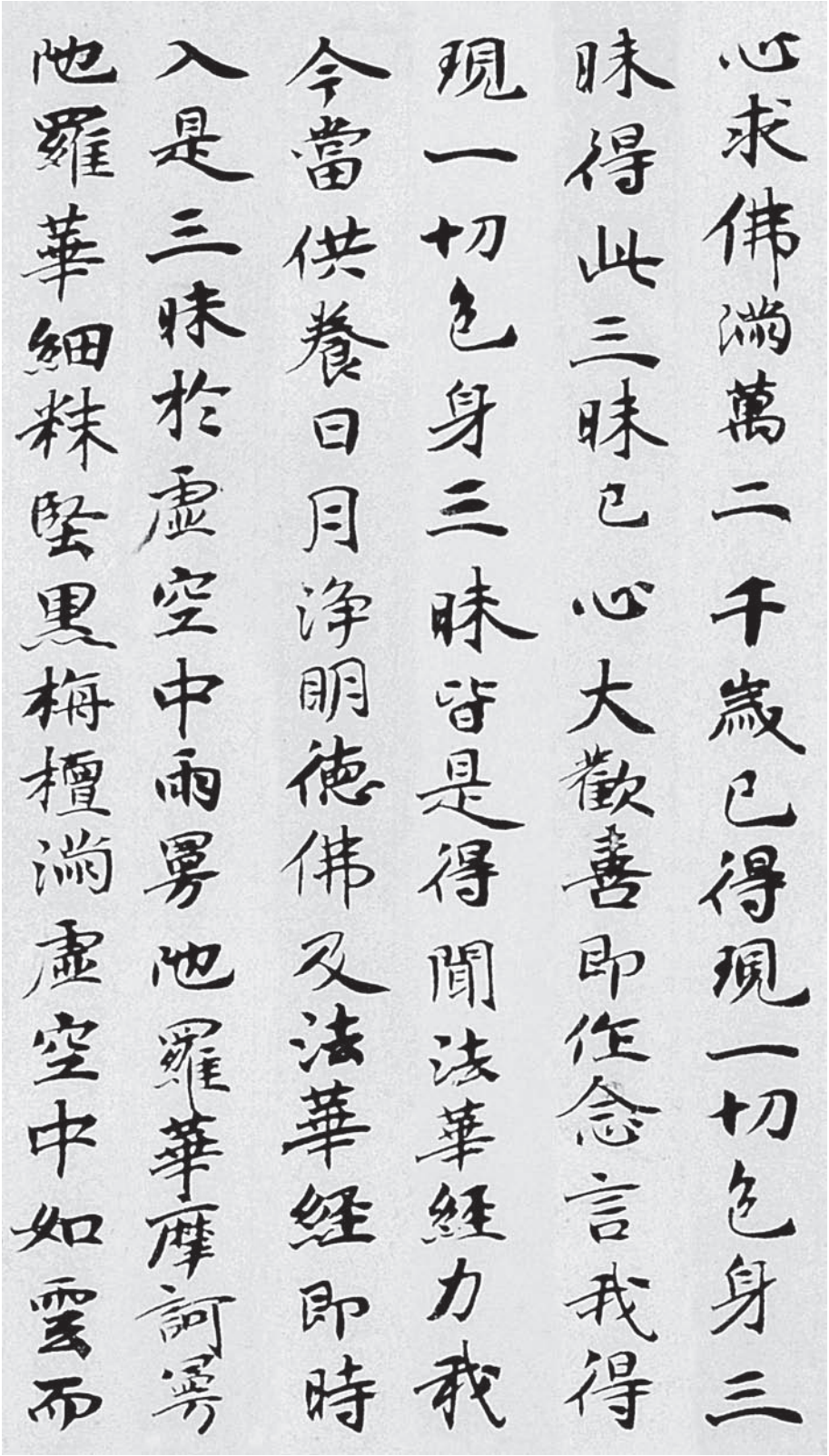
つらつらに鴨の泛き来る蒼の波うねり大きく見えにけるかも

〈大意〉連なって浮かんでいる鴨の動きを見ていると、波のうねりがことさらに大きく見えることだなあ。
〈作者〉北原白秋（一八八五～一九四二）　〈出典〉北原白秋歌集（岩波文庫）

自運＝与えられた課題語句を自運作品として用紙と筆を選び墨の磨り工合を工夫し、書作品として造型すること。それ故、先生に手本を書いてもらうことは避けたい。作品制作に当っては、古典からの集字などを試みて始めるのもよい。参考図書としては、現代字体字典（講談社）、五體字類（西東書房）、大字典（講談社）、古典かな字鑑（書藝文化新社）、広辞苑（岩波書店）、古語辞典（旺文社）などを見たい。

不二細字研究室　（会友～1級）　　国寶　法隆寺伝来細字法華經（擴大率二倍）

心求佛滿萬～月淨明德佛の百九十一字を清書して出品。



1　心求佛滿萬二千歲已得現一切色身三
2　昧得此三昧已心大歡喜即作念言我得
3　現一切色身三昧皆是得聞法華經力我
4　今當供養日月淨明德佛及法華經即時
5　入是三昧於虛空中雨曼陀羅摩訶曼
6　陀羅華細末堅黑梅檀滿虛空中如雲而

（一）心求佛。滿萬二千歲已。得現一切色身三昧。得此三昧已。心大歡喜。即作念言。我得現一切色身三昧。皆是得聞。法華經力。我今當供養。日月淨明德佛。及法華經。即時入是三昧。於虛空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。細末堅黑梅檀。滿虛空中。如雲而

（一）心に仏を求むること、万二千歲を滿し已りて、現一切色身三昧を得たり。この三昧を得已りて、心大いに歡喜して即ち念言を作す『われ現一切色身三昧を得たるは、皆これ法華経を聞くことを得し力なり。われ今、当に日月淨明德仏及び法華経を供養すべし』と。即時にこの三昧に入りて、虛空の中において、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・細抹の堅き黑き梅檀を雨らし、虛空の中に滿して、雲の如くにして下し、

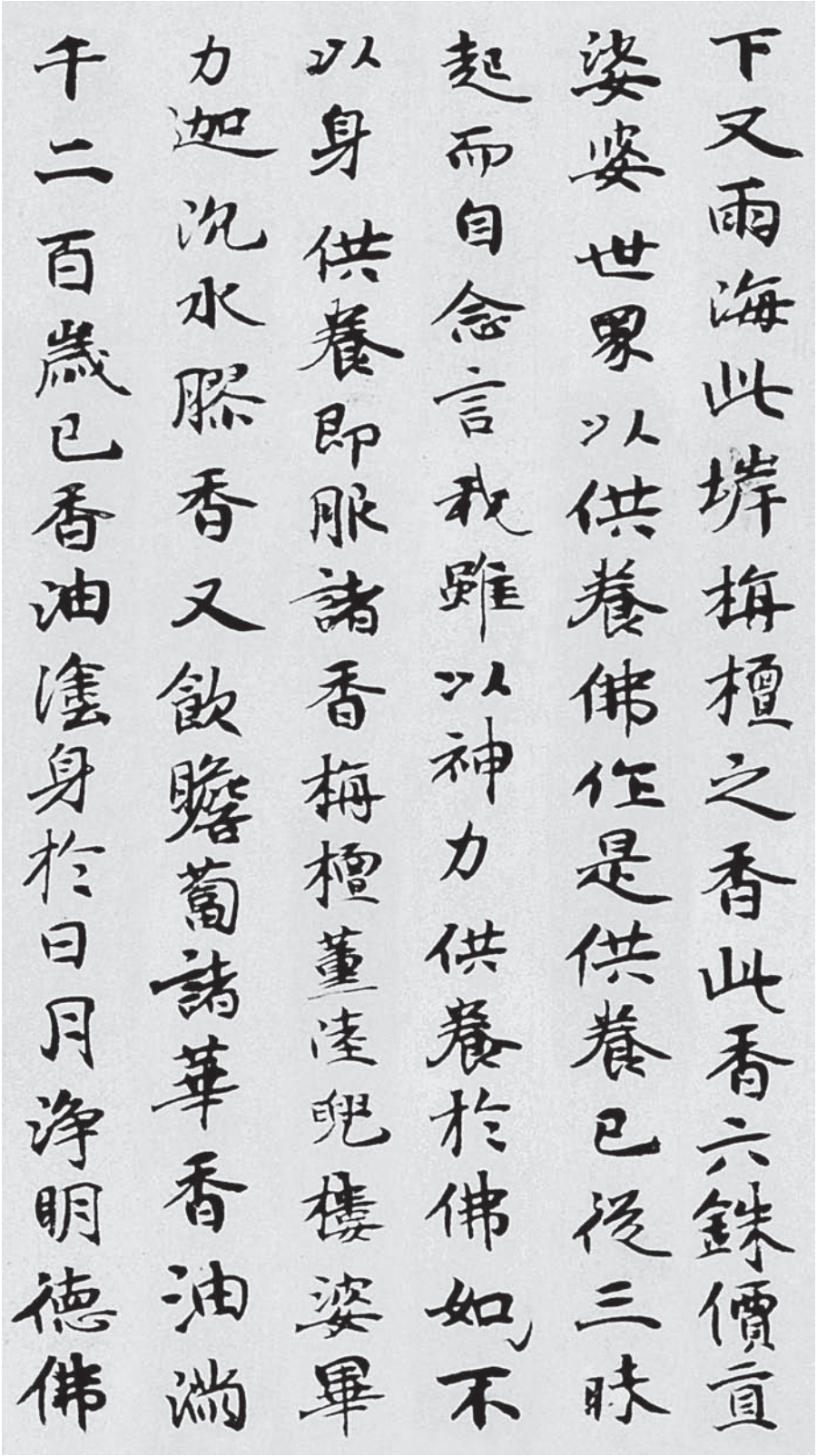
〈解説〉　石橋鯉城

1　心求佛滿萬二千歲已得現一切色身三
2　昧得此三昧已心大歡喜即作念言我得
3　現一切色身三昧

下の「法華経」（見開き 12 行）か、次頁「般若心経」一巻のどちらかを選んで清書し出品してください。

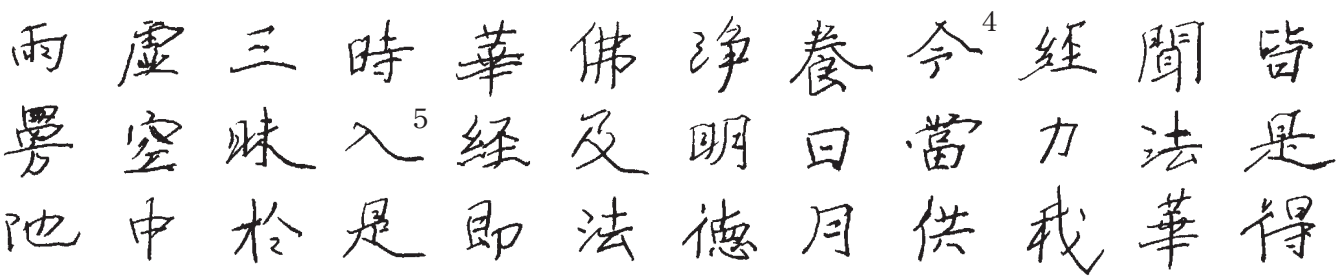
下。又雨海此岸。栴檀之香。此香六銖。價直
娑婆世界。以供養佛。作是供養已。從三昧
起。而自念言。我雖以神力。供養於佛。不如
以身供養。卽服諸香。栴檀薫陸。兜樓婆。畢
力迦。沈水。膠香。又飲瞻蔔。諸華香油。滿
千二百歳已。香油塗身。於日月淨明德佛（前。）

又、海此岸の栴檀の香を雨らす。この香の六銖は価娑婆世界に直り、
以って仏に供養したてまつる。この供養を作し已りて、三昧より起ちて
自ら念言う『われ神力を以って仏を供養したてまつれりと雖も、
身を以って供養せんには如かず』と。即ち諸の香たる栴檀・薫陸・兜樓婆・
畢力迦・沈水・膠香を服し、又、瞻蔔の諸の華の香油を飲むこと
千二百歳を満し已りて香油を身に塗り、日月浄明徳佛の（前において、）



7 8 9 10 11 12

全文音読して和漢混淆文の響きの美しさに触れましょう。
図版中文字で、判然としていないところは、経典の「釈文」中の同字の書き方に倣って書きます。
清書の氏名の後に「謹寫」または「敬寫」の二字を書き添えます。



不二篆刻研究室

▼**規定**…左の語句を刻しなさい。（朱白自由・大きさは4センチ角以内）

蘭飛馨

〈**読み**〉蘭（らん）、馨（けい）を飛ばす。
〈**大意**〉蘭の花が芳香を遠くまでただよわせている。

▼**随意**…好きな語句を刻しなさい。（朱白自由・大きさは4センチ角以内）

○作品は「半紙横½」を縦長にして体裁よく押印し、印影を提出。
○巻末の出品要項をよく読んでご出品ください。

一字書

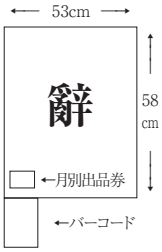
画数が多いので先ず画数を数えたい。

ヒント「ノツマ冂ムヌ」「辛」

▼**規定**…左に示す漢字を一筆書として墨継ぎすることなく「書」しなさい。（書体自由）

〈**読み**〉［音］ジ
［訓］や（める）・ことば・ことわ（る）
〈**意味**〉やめる。ことわる。ことば。言語。ふみ。文章。

〈おすすめの用紙〉
萬象 50枚（夾宣）
作品の左下に教室名・氏名・会員番号・段級を鉛筆で記入のこと。



▼**随意**…左に示す平がなに運筆の呼吸を吹き込んで生命（イノチ）ある字に仕立てなさい。（書体自由）

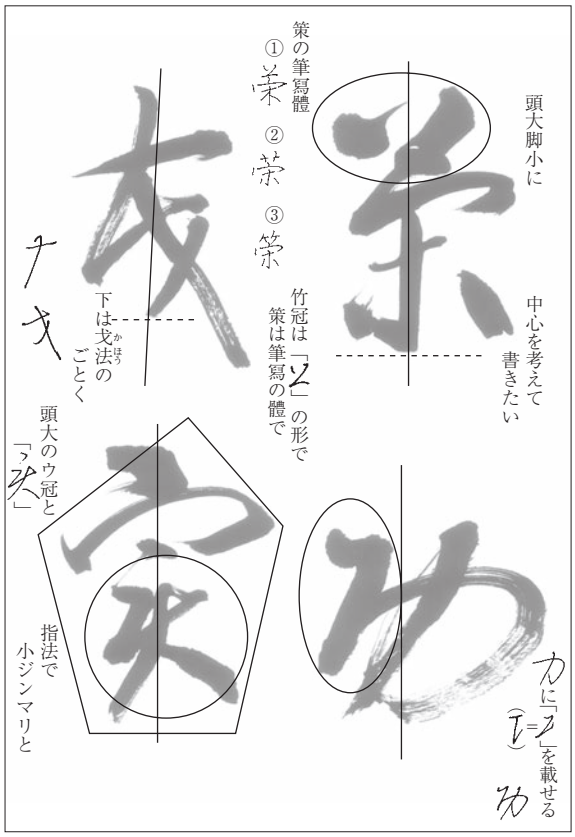
仮名の成り立ち「爲」を考えて創作すること。

〈おすすめの用具・用材〉
一字書 100枚（夾宣）
特選一字書 100枚（夾宣）
作品の左下に教室名・氏名・会員番号を鉛筆で記入のこと。

○バーコードは、段級欄に「一字書規定○段（級）」または「一字書随意」と書いて貼付してください。（**規定の方は段級を忘れずに**）
○落款は印のみか一字に雅印ぐらいで。
○巻末の「競書出品要項」をよく読んでご出品ください。

課　題　解　説

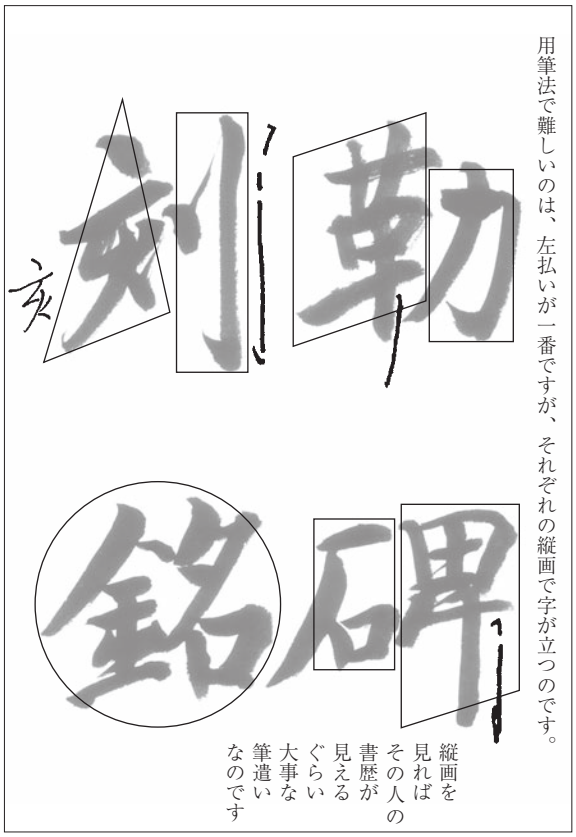
漢字半紙　五段～準初段（真草千字文）



（石橋鯉城）

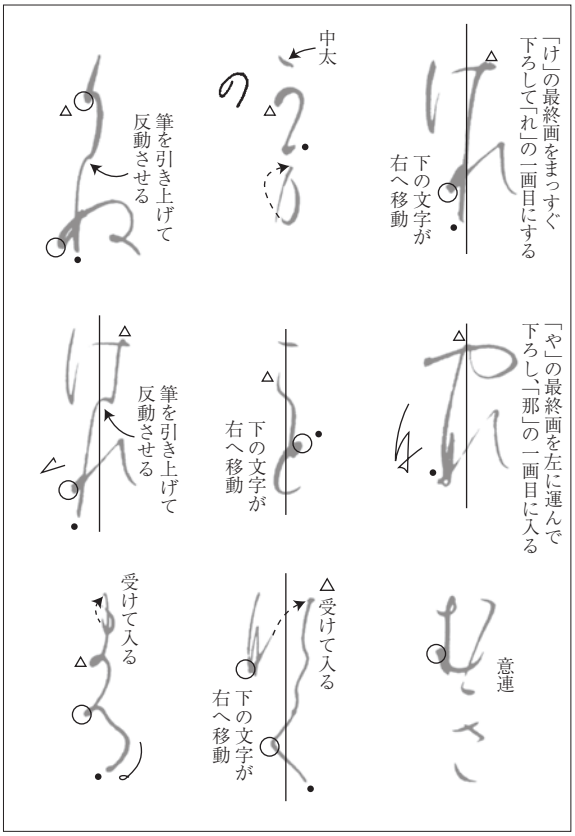
今月の出品期間
11月1日(月)～11月8日(月)必着

漢字半紙　1級～5級（真草千字文）



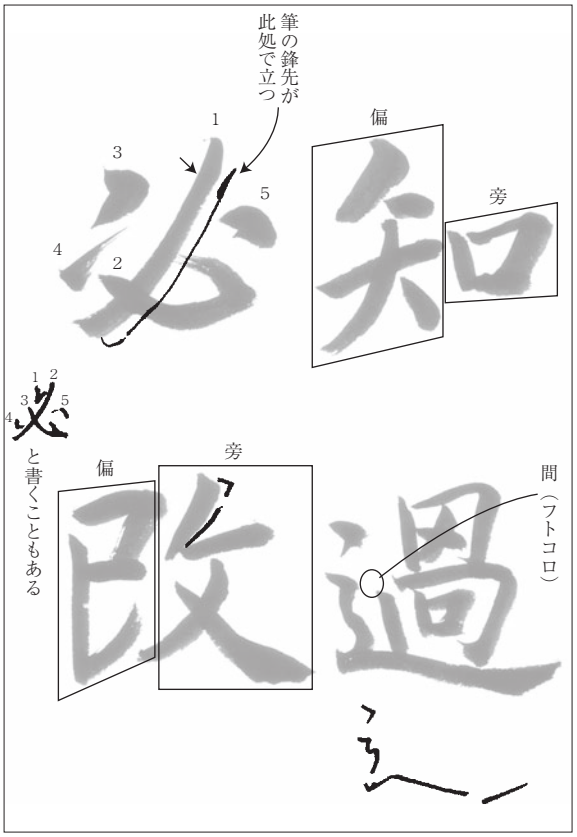
（石橋鯉城）

かな半紙　6級～10級



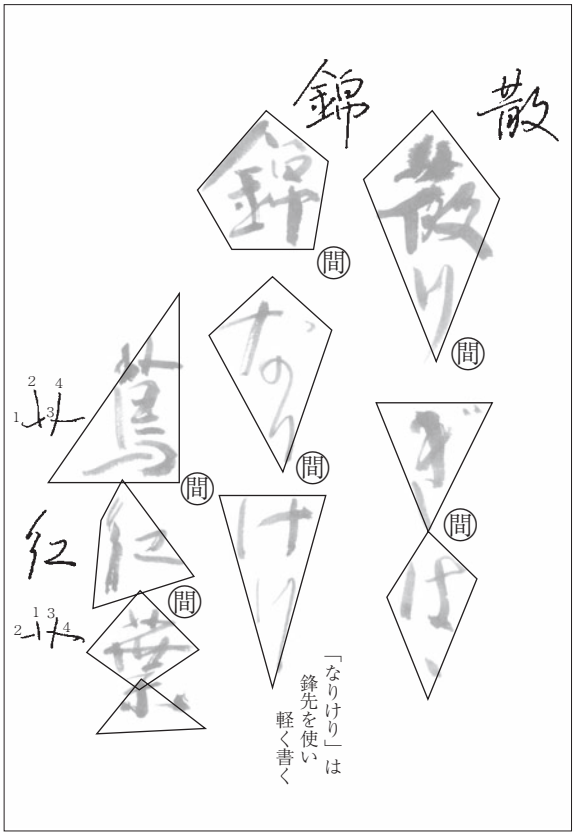
（川島史子解説）

漢字半紙　6級～10級



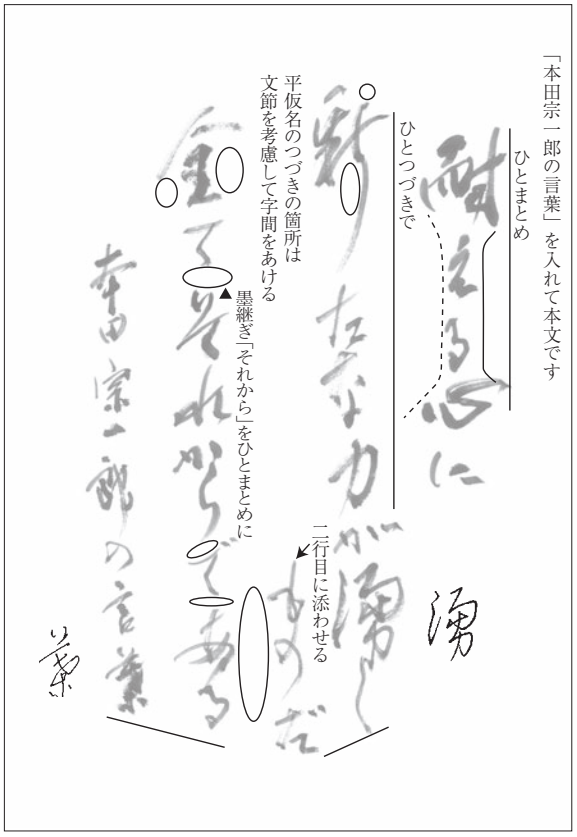
（石橋鯉城）

新和様半紙　1級～10級



（石橋鯉城）

新和様半紙　五段～準初段



（永井香樹）

漢字条幅　五段～準初段

（林田香濤）

「牛橛造像記」（四九五年）は北魏の造像体と呼ばれる雄健な書風の楷書である。初唐風の楷書とは違う力強さ、たくましさをしっかりと捉えていくのが目標である。

○用筆…起筆・大きく角ばる。収筆・丸く止めない。転折・二段に角ばって折れる。点・三角形に。

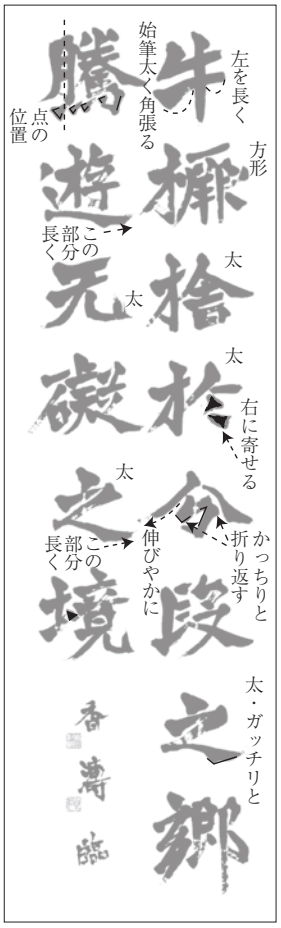
○字形…右上がりに、ガッチリと懐を広くする

※元気よく書こう。

〈用具・用材〉

筆＝和筆・羊毫筆　墨＝和墨・油煙墨

紙＝中国画仙紙



漢字条幅　1級～10級

（小久保嶺石）

○五文字作品としての体裁を考え、構成の上で文字の字形・墨色・バランスなどに留意する。

○東晋王羲之や宋代黄山谷、犀水千字文などを参考にする。

月…含墨し、どっしりと。二つの点は向きを変えながら低い位置に。

明…明るく動きのある表情。一字目の「月」と趣を変える。

秋…火の1画目を中心にいれて、偏旁を纏める。火の縦画は突いてから直筆で。

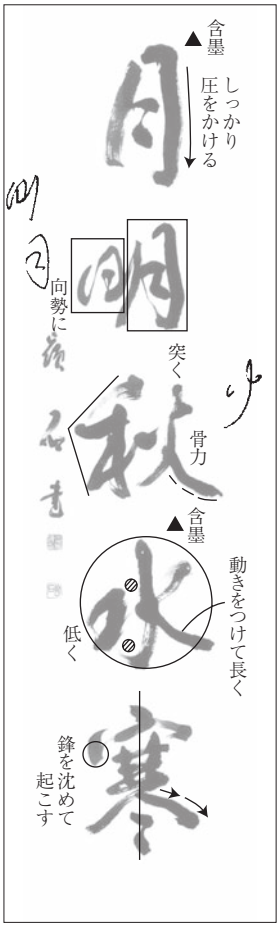
水…ここで含墨するが、ゆっくり運筆して渇筆も加えたい。

寒…ウ冠は膨らませるようにして下の空間をつくる。中心軸を意識する。

〈用具・用材〉

筆＝和筆・羊毫長鋒　墨＝和墨・油煙墨

紙＝中国画仙紙



かな条幅　五段～準初段

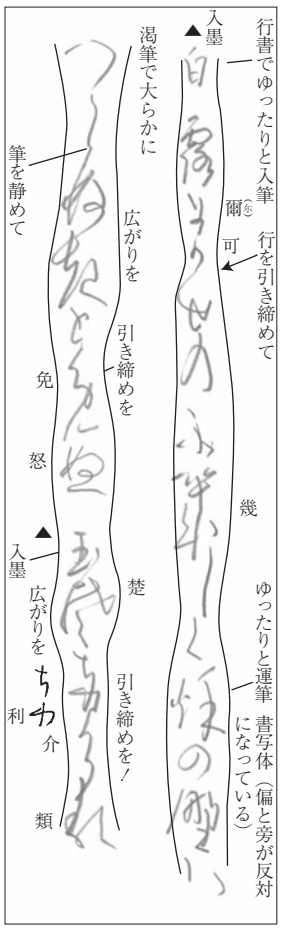
（中村清徳）

「白露」やさしい行書で入る「り」よく使う変体仮名ですが字源は古典体の「爾（尓）」である事を知っておきましょう。次は変体がなを入れつ、行の振幅を考えましょう。「秋」は書写体を使用しました。二行目は思いきってのびやかに渇筆で振幅をつけつ、書き上げましょう。結句「玉」で入墨「ま」で広がりを表現、「ち利介類」を引き締めて作品をまとめましょう。

〈用具・用材〉

筆＝かな用条幅筆　墨＝和墨

紙＝画箋紙



かな条幅　1級～10級

（内堀信嶺）

○前半で行の伸びやかな流れを強調し、後半に構築性を意識してみました。

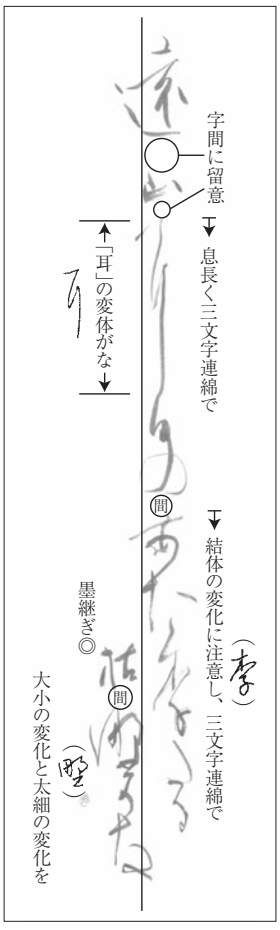
○全体に粗密・流動の変化を求めてみました。

○布置章法は今までの作例と指したる違いはないので、参考手本を観察しながら、行の流動を考えて書いてみてください。

〈用具・用材〉

筆＝かな条幅用筆　墨＝和墨

紙＝かな用画仙紙



昭和二十八年二月二十日第三種郵便物認可　毎月一回一日発行　定価八〇〇円
令和三年十月二十五日印刷　令和三年十一月一日発行　第六十九巻第十一号　通巻第八二一号

不二　一般版

段級		会員番号
漢字半紙		
かな半紙		
新和様半紙		
漢字条幅		不二教室
かな条幅		氏名
新和様条幅		
細字		
篆刻		
一字書		

東京都美術館にて全日本学生書道展と同時開催

書家の登龍門　厳正公平な作品本位の審査

第71回 書道學會展

締切間近

作品募集　出品期間：令和3年10月11日（月）～15日（金）必着

会期　令和４年１月４日［火］～10日［月］

会場　第一会場／東京都美術館２階第３・４展示室
（東京都台東区上野公園 8-36）
第二会場／東京芸術劇場 ギャラリー１（５階）
（東京都豊島区西池袋 1-8-1）

部門　創作（漢字・かな）・臨書（漢字・かな）・
新和様・漢字造型（一字書・少字数書）・写経・篆刻

褒賞　〈公募〉文部科学大臣賞・東京都知事賞・会長賞 他
〈審査会員・無鑑査〉内閣総理大臣賞・中国大使賞 他

【主催】公益財団法人 日本書道教育学会
【後援】文化庁・中国大使館・東京都・読売新聞社

〈送り先・問い合わせ先〉公益財団法人 日本書道教育学会
〒101-8358 東京都千代田区西神田 2-2-3　TEL 03-3234-3956 FAX 03-3234-3548
http://www.nihonshodou.or.jp

～秋から学んで、師範取得をめざす！～

書道・ペン・篆刻の教室

書學院

Ⅱ期入学生募集中

見学随時受付中！
無料体験入学実施中！

古典臨書や写経、作品研究を中心とした特設科コース、指導者養成セミナー等、多数の講座をご用意しております。

公益財団法人
日本書道教育学会 書学院

神田書学院（03）3265-5491　大阪書学院（06）6599-9550
川奈書学院（0557）45-3265　http://www.nihonshodou.or.jp/